



会報

# 札幌くらぶ

2018年11月 第84号

編集・発行／札幌くらぶ 〒064-0931 札幌市中央区中島公園 1-15 札幌事務局気付  
ホームページ <http://sakkyoclub.net/sakkyoclub/>

## 全国のオーケストラファンクラブが札幌に集合！ JOFC 総会開催

第12回日本プロオーケストラファンクラブ協議会（JOFC）札幌総会が、9月22日にホテルマイステイズプレミアム札幌パークにて開催されました。総会に先立って幹事会が開かれ、第612回札幌交響楽団定期演奏会を鑑賞したあと、総会と交流会が開催されました。

JOFCに加盟している10

団体のうち、今回は九響倶楽部とNPOオーケストラ創造（熊本）が欠席でしたが、総会では参加8団体によって次の4点が確認、決定されました。

①役員改選については全員留任とする。

②次年度の総会は2019年11月23日（土）仙台に

て開催する。2020年度は山形開催を予定する。

③2019年3月17日（日）に都響倶楽部主催で定期演奏会鑑賞と交流会を開催する。

④9・6北海道胆振東部震災に札幌が開催する復興コンサートに対する支援金を募る。

総会は上田文雄会長の挨拶から始まり、「今日の札幌の演奏はいかがでしたでしょうか」との問いかけに始まり、「なぜ、私たちはオーケストラを支える活動をするのか、この意見交換の中でいろいろな悩みを、そして工夫をみんな話しながら、盛り上がる、そして元気をもってまたこれからの1年をオーケストラとともに、私たちの街を、生活を豊かにする、そんな材料をお持ち帰りいただきたい。」と結ばれました。

その後参加者約60名が6つの分科会に分かれて意見交換を行いました。

各分科会のテーマは以下のとおりです。  
A セミナーやコンサート（企画、実施、費用）

- B 会報誌（記事内容・会員や楽員の寄稿・費用）
- C 招待事業（若年層のファン開拓、協賛金・企業との連携）
- D 交流会や親睦会（楽員や会員との交流・呼びかけ・参加状況）
- E 会員募集や宣伝活動（募集方法、ちらし作成・配布）
- F 楽団支援（支援の種類・方法、寄付金）



村田札幌理事長、バーメルさんも参加して記念撮影

各分科会で活発な意見交換が行われた後、協議内容についての報告がありました。「札幌くらぶサロンのように参加者を会員だけに限るのではなく、広く友人知人にも声をかけて参加してもらうという考え方はファンクラブとしての活動も広がるし、楽員さんのためにもなるのではないかと感心させられました。」との発表もありました。

交流会は札幌コンマスの大平まゆみさん、チェロ奏者小野木遼さん、ヴィオラ奏者鈴木勇人さんが演奏するモーツァルトの「ディヴェルティメント 変示長調 K563」によって始まりました。

その後、村田正敏札幌理事長からは「地域のオーケストラを支えていくことは総力作業です。そのためのノウハウを共有し、全国のオーケストラをより高めるような活動が行われればと願っています。」との挨拶がありました。また、高橋北海道知事、秋元札幌市長が地震対策で欠席のため、代わって札幌市の前田真子文化部長から「196万人の人口を有する札幌には、市民が生き生きと暮らして



テーマごとの分科会

いくためには生活の潤いや心の豊かさをもたらす芸術文化の存在が不可欠であります。」と挨拶をいただきました。

交流会は全国のファンクラブから持ち寄った銘酒やワインを片手に我が町の自慢のオーケストラが続きました。初めて参加した会員からも「全国の方々との交流、楽しかったね」との声が聞かれました。

6年ぶりの札幌開催でしたが、スタッフが準備を重ね、まさかの震災を受けながらも開催にこぎつけ、大きな自信になったと思います。また、参加いただいた皆さんにとってオーケストラのある街の市民として様々なことに気づいていただけたことも重要でした。JOFCはより英知を集めてさらに発展をしていきたいと思う開催でした。

JOFC 幹事長  
札幌くらぶ副会長 西川吉武

ウェルカムコンサート



JOFC in 札幌2018全国交流会

11月〜2月定期演奏会 名曲シリーズ

# 演奏会を楽しく聴くために

八木幸三 (札幌くらぶ顧問)

## 第614回定期演奏会

11月30日(金) 19:00

12月1日(土) 14:00

指揮 マックス・ボンマー

ピアノ マルティン・シュタットフェルト

### ■メンデルスゾーン

#### 交響曲第5番ニ短調「宗教改革」

第5番と付けられているが、15歳の時に書かれた第1番の後、21歳で書かれた比較的初期の作品。もともとユダヤの家のメンデルスゾーンだったが、父の代にキリスト教に改宗し、自らも熱心なルター派信者で、ルターの信仰告白から三百年にあたる1830年の記念と

マックス・ボンマー



©Y.Fujii

さ華やかさをもち合わせている。この曲の原曲はヴァイオリン協奏曲。バッハがライプツィヒのコレギウム・ムジクムの指揮をしていた当

時、その演奏会のために彼自身の旧作や他の作曲家たちの作品を編曲したものも多かったようだ。この曲の壮麗さは、ピアノの豊かな音色でいつそう真価を発揮するのではないだろうか。バッハがもしピアノの音色を知っていたら、そう思ったに違いないだろう。

### ■シューマン

#### 交響曲第3番変ホ調「ライン」

シューマンの交響曲は、そのオーケストレーションに弱点があるとされている。まず第3



©Marco Borggreve

マルティン・シュタットフェルト

番のスコアを見ると、音符の多さと休符の少なさが目に付く。第1楽章から管楽器と弦楽器での同じ動きが多く、まるで吹奏楽と弦楽合奏が、同時にこの曲を演奏しているかに見える。しかし、本当にシューマンはオーケストレーションが不得意だったのだろうか。

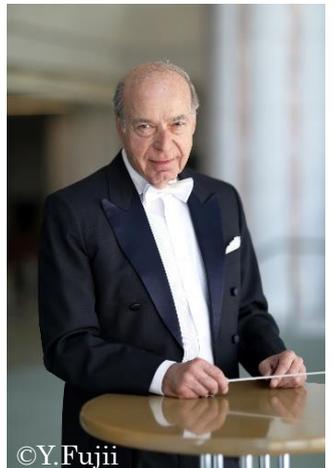
第3番の分厚いオーケストレーションを俯瞰的に聴くと独特の味わいを感じる。彼は、楽器を多層にすることで、より管弦楽の音色に奥深さが生まれると考えていたのではないか。彼の詩的なロマンティズムに溢れた美しい旋律やシンコペーションによる弾むような楽想、さらに、主題を有機的に展開させる楽章間の統一性を生み出す精緻な構成は、彼自身のオーケストレーションで、はじめて生彩に描かれる。

### ■マルタン

#### 7つの管楽器、打楽器、弦楽のための協奏曲

20世紀に活躍したスイスの作曲家マルタンは、古楽器の復元に大きな役割を果たし、古楽の再興、並びに音楽における新古典主義の火付け役ともなった。彼の代表作であるこの曲も新古典主義的な作品で、バロック期の合奏協奏曲をモデルに描かれており、コンパクトな編成が、透明感のある清々しい音楽となっている。

この曲は、1776年にその



©Y.Fujii

マティアス・バーメルト

### ■ブラームス

#### 交響曲第2番ニ長調

ブラームスの交響曲第1番と第2番は、対をなしていると言われている。このことは、ベートーヴェンの第5番と第6番の相似性が引用される。確かに第1番はハ短調であり第2番が「田園風」でおおらかな楽想を持つニ長調、しかも同時期に書かれた。ブラームスは20年の歳月を費やした第1番を完成直後、第2番をわずか4ヶ月で書き上げている。

ブラームスをはじめて訪れたペルチャツハでこの曲は作曲されたが、彼にとってここは、桃源郷のような地であったらしく、ハンスリックに宛てた手紙には「ここでは旋律がこんなに沢山生まれてくるので、散歩の時、それを踏みつぎさないように気をつけないといけない」とまで書いている。

### ■モーツァルト

#### セレナータ・ノットウルナ

## 第615回定期演奏会

1月25日(金) 19:00

26日(土) 14:00

指揮 マティアス・バーメルト

第616回定期演奏会

2月15日(金) 19:00

16日(土) 14:00

指揮 広上 淳一  
ピアノ ジャン・  
エフラム・バヴゼ

この定期では、ラヴェルの魅力がたっぷり味わえる。

■道化師の朝の歌

夜通し飲んだ後の朝帰りを経験された方はいるだろうか。この曲名にある「道化師」とは、「人気者」「伊達男」という意味もあり、「伊達男の朝帰りの歌」とでも言える。つまり歓楽の一夜を明かした後のいなせな男の鼻歌である。「音の魔術師」と呼ばれたラヴェルだけあって、ピアノの原曲を絵画的要素の強い巧みなオーケストレーションで映像描写のように仕上げてい

広上 淳一



らしい斬新さが見事に結実した傑作で、長調作品同様、ジャズの要素が加味されていることも大きな特徴だ。

■ピアノ協奏曲ト長調  
■左手のためのピアノ協奏曲

ピアノの名曲を数多く作曲したラヴェルだが、ピアノ協奏曲は2曲しか残さず、彼の晩年に同時進行で書かれている。「ピアノ協奏曲ト長調」は、「モーツァルトとサン＝サーンスの協奏曲の精神で書いた」と作曲者が言っているとおりの伝統的な3楽章形式でつくられている。しかし、ロマン主義や民俗主義が内包さ

れていると同時にジャズの影響も感じられる。ラヴェルは1928年にアメリカ演奏旅行をし、指揮者、作曲家として高い評価を受けた。この経験が作品に影響しているのは確かである。

左手だけのピアノ協奏曲という異例の作品は、第一次世界大戦で右手を失ったウィーンのピアニスト、パウル・ヴィトゲンシュタインの依頼でつくられた。ラヴェル

■古風なメヌエット

この曲は、シャブリエの「華麗なメヌエット」やサティの「ジムノペディ」の影響があったと作曲者自身が述べている。しかし、それとともにラヴェル独特の和声や対位的な技法がとられ、ピアノの原曲が、作曲者の得意とするオーケストレーションにより華やかに彩られているのも特徴だ。

■ラ・ヴァルス

手塚治虫の短編アニメに「水滴」という作品がある。ひとりのイカダで漂流する男が、一滴の水を求めて苦勞する内容なのだが、背景にこの音楽が流れ、非

ジャン

エフラム・バヴゼ



©Ben Ealovega



©Martin Richardson

尾高 忠明



©Kazashito Nakamura

岡田 奏

名曲シリーズ

愛を奏でるラフマニノフ

2月23日(土) 14:00  
指揮 尾高 忠明  
ピアノ 岡田 奏

■芥川也寸志  
弦楽のためのトリプティック

文豪の三男として生まれた芥川の名前を聞くと大河ドラマ「赤穂浪士」のテーマ音楽や「八甲田」「砂の器」などの映画音

常に効果的だった。元々、ロシア・バレエ団のディアギレフの依頼で作曲されたものの舞踊曲としては使われず、管弦楽曲として初演された。はじめ不気味な雰囲気から徐々に華やかな音楽が垣間見えてくる。幻想的なワルツの旋回は、第1次世界大戦という作曲当時の陰影を感じさせる。

楽が頭に浮かぶが、黛敏郎、團伊玖磨らとともに戦後のクラシック音楽界を牽引した作曲家でもある。この曲は「三連画」を意味する「トリプティック」が題名に用いられ、ニューヨークのカーネギー・ホールにおいてクルト・ヴェス指揮ニューヨーク・フィルにより初演された。オスティナートをを用いた、土俗的雰囲気は恩師でもあった伊福部昭の作風に通じるところがある。

■ラフマニノフ

ピアノ協奏曲第2番ハ短調

ラフマニノフは、幼少期豊かな森と美しい湖のあるノヴゴロドで過ごし、そこで夜ごと教会の鐘の響きで感性をふくらませたと言う。彼の作品の中でも最も有名なこの曲は第1楽章の冒頭で、重い鐘の和音がピアノにより奏でられ、哀愁に満ちた濃厚な旋律がとうとうと流れ出す。純愛映画の背景にぴったり

の甘い名旋律を聴くと、若かりし日の青春のときめきが蘇ってくるようだ。

■ムソルグスキー(ラヴェル編)  
組曲「展覧会の絵」

原曲はムソルグスキーが親友であった画家の遺作展を訪れたときの印象がもとになって、ピアノ作品として1ヶ月足らずの短期間で書かれた。彼の生前中は演奏されなかったが、リムスキー・コルサコフにより改訂され、コルサコフの弟子が管弦楽化している。そして、原曲から半世紀を経てラヴェルが編曲した管弦楽版が最も良く演奏されるようになった。まるでリレーのようにこの作品は受け継がれ、また多くの作曲家がポピュラー曲などに編曲しているが、ムソルグスキーの原曲の魅力が形を変えても生き続けている証でもある。

(写真協力 札幌交響楽団)

## 楽員さんに興味津津 ⑩

## ヴァイオリン奏者 熊谷勇大さんに聞く

## ♪ 2歳でヴァイオリン！

ました。特に、キン肉マン消しゴムとビックリマンシールに釣られていましたね。

ヴァイオリンを始めたのは2歳の時です。当時、書店に勤務していた父は英才教育の本をたくさん買ってきたようです。その中の一冊に「赤ちゃんばんざい！」という本があり、この本が僕がヴァイオリンを始めるきっかけとなりました。幼児教育に造詣が深い、井深大さんと鈴木鎮一さんの対談集です。鈴木鎮一氏が対談の中で「ヴァイオリンを習っている子供は、交

通事故にあいにくいのです。」と語っています。特に音楽を学んだ事のない両親ですが、この言葉が動機で僕にヴァイオリンを習わせました。

ところが、ヴァイオリン教室には楽しく通っていたそうですが、家庭での練習が嫌でたまりませんでした。母による強制的な練習のさせ方によるものだったと思います。幼いころには、それでも、練習後のごほうびに騙されながらもなんとか続けて来た

その後、中学生になっても、練習嫌いには続きませんでした。練習回避の為に、「ながら練習機」を作したり、色々と知恵を絞りました(笑)。

しかし、嫌だった練習も反射神経を養うのには大いに効果があったと思います。物を落としたり空中でキャッチするようなことは今でもよくあります。音楽に対する深い興味はなかなか持てずにはいましたが、数字には興味を持つようになってい

ました。父がマンツーマンで数学を教えてくれたこともあって、幼稚園の時には二次関数を解くほどのめり込んでいました。

小学校6年生の時、初めて全国コンクールに出場し、思いがけず良い賞を頂く事ができました。ちょうど大人のヴァイオリンのサイズに替える時期とも重なって、記念に楽器を新調しようとして、楽器店を訪れました。「これを弾いてごらん」と出されたヴァイオリンの音色に、初めて全身に鳥肌が立つという感覚を子供ながらに覚えました。それまでは親に物をねだったりしたことはなかったのですが、このヴァイオリンに衝撃を受けて思わずこれが欲しいと母にねだりました。しかし母が値段を聞くと3億円と言われ、ストロディヴァリウスを聞いた店員さんの粋な計算もやめました。

## 3歳 最初の発表会



です。

この頃に連れて行ってもらったコンサートで忘れられないものがあります。

## ♪ 15歳の決断

ヴァイオリンの道を選ぶように思ったのは24歳の時です。15歳から約9年間のブランドがありました。高校進学の時、当時習っていた札幌の元コンマスのニキティンさんからは、プロの道のためロシアで勉強することを勧められていました。しかし僕は普通高校への進学を自分の意思で決めました。その時はつきりと、初めて

自分の進路は自分で選択したいと思っていました。敷かれたレールに乗せられていた自分に決別しました。レッスンに通う事をやめ、練習もやめました。

けれども、僕の中にヴァイオリンは残っていました。唯一の自己表現として。それで、高校2年の時に、ちよっと目立ちたかったのです。『ちえりあ』でコンサートを開きました。高校の友人達の協力も得て『ちえりあ』のホールが満員になりました。それが言ってみれば初リサイタルです。

## 拍手で仕事が終わる幸せ



## プロフィール

1984年札幌市出身。2歳よりヴァイオリンを始め、これまでに藤沢博子、岡田耕爾、アリビア・ヴァンディシエバー、グレブ・ニキティン、三上亮の各氏に師事。日本クラシック音楽コンクール全国大会審査員特別賞等を受賞。イルミナートフィルハーモニーオーケストラに設立時から2014年4月まで在籍し、2013ヴァチカン国際音楽祭及びサン・ピエトロ大聖堂におけるローマ法王謁見演奏の選抜メンバー。PMF2014に参加、オープニングコンサートではコンサートマスターを務めた。2015年7月札幌交響楽団に入団。

高校1年生最後の発表会「シヤコンヌ」



高校1年生 最後の発表会「シヤコンヌ」

## ♪ 9年間の寄り道



高校2年生のリサイタル



ローマのサン・パオロ大聖堂で

高校を卒業してからは大学にも行かず、すぐに起業しました。いろいろやって、成功したのも失敗に終わったのもあります。そんなことを繰り返しながら生きていくうちに、仕事の価値とは何だろうかと考えるようになりまし。お金を儲けるとか儲けないとかももちろん大事ですが、大勢の人に喜んでいただける仕事、自分が労力と時間を注いでもいいと思える仕事を探し始めていました。

僕は小学校2年生からヴァイオリンを札幌にいらっしやうた岡田先生に習っていました。その先生の耳に僕が悩んでいるという話が入ったようです。先生は「そうやって何か迷っているのだったら、もう一度音楽をやってみないかい」と声をかけてくださったのです。どちらかと言えば、自分の人生を圧迫してきたものの一つとしてしか捉えていなかった音楽を仕事にしたいなんて、生まれてから一度も考えたことはありませんでした。しかし、自分が仕事として思い描いていることと先生の言葉とがその瞬間、強烈に結びついたんです。もし僕に今からでも間に合う才能が何処かにまだあるのだとしたら、それに懸けてみたい、という気持ちになっ

たのです。24歳の時でした。この9年間のブランクは、僕が音楽の道に行きつくために必要な寄り道でした。ずっと音楽の世界に浸りっぱなしだったから、おそらく今は別の道を歩んでいた気もします。

### ♪ 仕事の終わりはいつも拍手

決断後、これからの人生を決める為の新しいヴァイオリンを

手に入れ、全ての仕事をやめ、おまけに楽譜が読み易いようにとレーシック手術まで受け、家に籠ってずっと練習をしました。1日に15時間くらいしたこともありました。僕の人生で初めて、覚悟を持って本気でヴァイオリンに挑みました。

す。仕事仲間が、すばらしい先生となつて周りにいてくれるのですから。

僕が札幌生まれで、札幌が大好きです。他の所で暮らすことを考えたことはありません。そして岡田先生とニキティン先生が札幌で活躍していた事もあり、なんとしてでも札幌にと強い気持ちでした。3回目のオーディションでようやく認めて戴

きました。6年かかりました。6年の間には、指揮者の西本智実さんが設立したイルミネーターフィルというオケに在籍していた事もあります。そのオーケストラが初めてアジアからヴァチカンに招かれ、それに参加しました。初めての海外旅行でした。さらにPMFにも参加し、コンサートマスターという貴重な経験もしました。

仕事ってなかなか無いですよ！

### ♪ 無音のくつろぎ

先日、hitaruでアイダを演奏しましたが、ちょうど入団したばかりの2015年1月にもアイダの公演がありました。この三年間の自分の成長を確かめる非常に良い機会となりました。今回のように同じ演目を重ねることに自分の歩みを確かめて行ければと思っ

クラシックは大好きです。聴いていて深く感動を覚えます。車の中ではジャズかな？家では無音です。テレビは持ってませんし、ラジオもかけません。音がないのはくつろぎますね。何にも邪魔されず思考できるというのが一番のくつろぎかもしれません。

まずは第一歩、僕がそのきっかけになれば嬉しいなと思います。

札幌は僕にとっては、めちゃくちゃ豪華な音大でもありません。

一人の時間が好きな反面、異業種交流会などの出会いの場にも積極的に参加しています。ク

担当/井上・中居・村山・塚田



PMFでキョヒルさんと

## ピッコロトランペットに魅せられて

第23回「札響くらぶサロン」は「なかなか雪が降りませんねえ」という言葉で始まりました。11月10日(土)、いつものように豊平館で開催されました。ここを会場にすることはもうすっかり定着した観があります。というよりは回を重ねることに豊平館のこの広間から離れることはできないのではないかと、思いを強くしています。

第1部の「札響定期演奏会プレトーク」はいきなり聴き比べから始まりました。かかった曲はシューマンの交響曲第4番。一瞬私の頭は混乱しました。次の回の定演の曲は「ライン」ではなかったのか。この聴き比べは第



同期生同士の息の合った演奏

4番の初稿と改訂版とを聴き比べるものであったのですが、聴き終わった後、八木先生の意図、そしてシューマンへの評価がよい。最初は「ピッコロトランペット」の音を聴いたことでは、さらに、音色や姿かたちばかりではなく、楽器のしくみについての話も聞けました。今回のサロンは本当にミニコンサートだったのでしようか。アンコールの「美女と野獣」と



これがフリューゲルホルン

くわかりました。改訂を加えることよって響きに厚みを増した第4番、それを耳で確かめることができました。

続いての「札響アーカイブス」では第120回の「ライン」、第67回の「宗教改革」、第149回の「ブラ2」を聴くことができました。いずれも札響の草創期の演奏でしたが、若々しさ、勢い、熱気のようなものを感じました。来たる12月と1月には今の札響はどのような演奏を聴かせるのでしょうか。楽しみと興味

は尽きません。

第2部は札響副首席トランペッター、鶴田麻記さんによるミニコンサート。ピアノは鶴田さんと芸大で同期だったという水口真由さんでした。

最初に演奏されたのはパーセルの「トランペットヴォラント」で、続いてシューマンの「3つのロマンス」。2曲ともピッコロトランペットで演奏されました。私はピッコロトランペットの音が大好きです。あの素材でしぼり出すような高音がたまらないのです。鶴田さんの「ピッコロが好きで」という言葉に「我が意を得たり」との思いがしました。お話の中でトランペット吹きが避けて通れないのがハイドン、フンメル、ネルーダの三人ということでしたが、ネルーダの協奏曲を吹く前にハイドンの一節を垣間見せるところなど「にくいなあ」と感じました。



トランペットいろいろ

今回何よりも楽しく嬉しかったのはホルネット、フリューゲルホルンを含めて7種類もの「ラッパ」の音を聴いたことです。さらに、音色や姿かたちばかりではなく、楽器のしくみについての話も聞けました。今回のサロンは本当にミニコンサートだったのでしようか。アンコールの「美女と野獣」と

## 柿落し公演「アイーダ」を聴いて

会員/村山英朗

本格的なオペラハウスの柿落し公演が10月7日と8日の両日、歌劇「アイーダ」によって札幌文化芸術劇場で催された(8日に鑑賞。「カルメン」「トスカ」「椿姫」などとともに、最も高い上演回数を誇るこのオペラは華麗なバレエや絢爛豪華な舞台装置もあって、柿落し興行にはうってつけの演目である。このような場面に立ち会えた幸せをまず喜びたい。

今を時めくバtteイストニーと札幌交響楽団の奏でる、冒頭の神秘的な響きは瞬時に僕を古代エジプトのロマンへと駆り立ててくれた。それにしてもわくわくするような滑り出し、この前奏曲が最晩年の傑作「ファルスタッフ」の精妙さに通じると言ったら言い過ぎだろうか。ヴ

水口さんの独奏によるショパンの練習曲を含めると10曲、1時間半にもなるうとするコンサートでした。「ミニ」とはとても言えそうにないすばらしい「ミニコンサート」で、トランペットをたっぷりと堪能することができました。

エルデイの世界に寄せる僕の恋心がよみがえったのだ。

前作の歌劇「ドン・カルロ」において、歌唱スタイルともどもオーケストラによる深遠な表現法を獲得したヴェルデイは、その勢いを持続させたままスエズ運河開通のための委嘱作品に取り組んだという。事実、随所に散りばめられた逞しく美しい旋律と登場人物の多彩で陰影に富む感情表現、さらに充実きわまる響きは「アイーダ」をオペラ史上屈指の名作の地位に押し上げています。50代後半という、正に円熟の境地に達した作曲者の面目躍如たる作品であろう。余りにも有名な第2幕の「凱旋の場」は、スエズ運河開通に寄せる作曲者のサービス精神が示されたものであろうが、聴き

どころはそれにとどまらない。要所をしめるアリアと重唱の格調、全編を覆う管弦楽の雄弁さに加え、合唱がかつてないほど多く配置されていることもこのドラマにメリハリをつけているのである。ユニゾンによる合唱の力強さと重唱のアンサンブルの多彩さが特に印象的であった。汲めども尽きない味わいである。

ということ、全編にわたって聴きどころに溢れているものの、音楽的感銘が最も深いのは第4幕第2場の大詰めであろう。様々な表現法を追い続けたヴェルデイであったが、ここではユニゾンで歌わせることにより、二人の心の一体感を強調していた。弦楽器のハーモニクス奏法であろうか、それとトレモロが永遠の静寂に吸収される二人の愛を彩っていた。単純さと複雑さがもたらすコントラストの美しさ、僕はいつまでもその余韻に浸ることができた。

ヴェルデイ・オペラのフトコロの深さに乾杯である。そして、若くして匂真つ盛りとなったバtteイストニーのもと、本格的オペラ上演への適性を十二分に示してくれた札響にも。

会員/村岡範男

# 「hitaru」への期待と印象

札幌文化芸術劇場 hitaru が10月7日にオープンしました。北海道初のオペラハウスへの期待と印象を札幌の楽員さん三名に伺いました。

## ヴィオラを選んだのもオペラの魅力から

小学校一年生の時にテレビでヴェルディの「アイダ」を観た。国が違い言語が違うと、すっかりオペラの魅力にはまってしまった僕は、人の声に最も近いと言われる弦楽器ヴィオラを選び、ドイツはデュッセルドルフのライン・ドイツ・オペラにて演奏しました。

そこではドイツ、イタリア、フランス、チェコといった多国籍のオペラを数多く演奏しました。国が違い言語が違うと、音楽のフレーズ感も違ってきました。その後「hitaru」にて数多くのオペラが上演されて、さらに多くのオペラ・ファンの方が増えていくことを切に願っております。

札幌ヴィオラ奏者

青木晃一

## 「イメンゾー フター」に感動

10月7日、8日の両日、札幌文化芸術劇場でヴェルディのオペラ「アイダ」全幕を演奏してきました。指揮者はヴェローナ生まれのアンドレア・パッティストーニ氏、まだ31歳の新進気鋭ですが、もう既に何度もアイダを振っているのか、暗譜

している様子でした。初日のリハーサルから東京二期会、バンドの陸上自衛隊北方面音楽隊、Wキャストのソリストの方々、そして我々オーケストラ、合唱団も渾身の力をこめて演奏しました。

オーケストラピットの中で、いつもと楽器の配置は違いましたが、会場は響きも良く演奏しやすく感じました。第一幕では、合唱が「Imenso Fida (偉大なるプタハの神よ Imenso)」と歌うところ、

写真提供：札幌文化芸術劇場 hitaru



カーテンコール

「アイダ」は練習、本番を含めると約10日という長丁場でしたが、とても楽しい日々でした。「棒」「箱」「仲間」がそのキーワードです。

「棒」は指揮者のパッティストーニさん。彼の溢れる情熱と才能は、盛り上がる場面で指揮をする度に上着からお腹がはみ出ている、それ以上に音楽が滲み出てくる程です。それでも約2時間半を全て暗譜で振るとは恐れ入りました。

「箱」は「hitaru」。札幌は、8月に「hitaru」で準備演奏会を行いました。その時は響きがちがっていただけでしたが、思っています。しかし、今回の「アイダ」では演奏しやすいピットだと確信しました。今までの

## キーワードは「棒」「箱」「仲間」

「棒」は指揮者のパッティストーニさん。彼の溢れる情熱と才能は、盛り上がる場面で指揮をする度に上着からお腹がはみ出ている、それ以上に音楽が滲み出てくる程です。それでも約2時間半を全て暗譜で振るとは恐れ入りました。

「箱」は「hitaru」。札幌は、8月に「hitaru」で準備演奏会を行いました。その時は響きがちがっていただけでしたが、思っています。しかし、今回の「アイダ」では演奏しやすいピットだと確信しました。今までの

札幌打楽器奏者

大垣内英伸

ケストラがトレモロでジャーンと出てきて第一幕を締め括るところなどは感無量の世界でした。第二幕の出だしでは、エチオピアの敗戦を悲しむ、力強いハーブのアルペジオが印象的でした。

お客様からも涙が出るほど感動したという声を沢山頂きました。

札幌第一ヴァイオリン奏者

河邊俊和

## Kitara ギャラリー展のご案内

札幌コンサートホールKitaraのギャラリーでは「札幌交響楽団ものがたり〜飛躍から発展へ」が開催されています。

この歴史展は「札幌の誕生」から始めて今回で3回目になります。シュヴァルツさん(69〜75年)から岩城宏之さん(75〜87年)の時代が中心です。壁を埋める写真には、この二人のほかに札幌を指揮する小澤征爾さん、映画「乱」の録音に立ち会う武満徹さん、初めての札幌海外公演の様子が写っています。

2019年2月3日(日)まで、大ホールで演奏がある時に見ることが出来ます。



写真提供：札幌文化芸術劇場 hitaru

アイダ 第2幕

## 音響検証に参加して

10月7日(日)にオープンする札幌文化芸術劇場 hitaru の音響検証を行う開館準備レコーディングが8月上旬行われ、「札幌くらぶ」からも7、8名が参加しました。

私は、オーケストラ(以下「オケ」)が入る2日目、3日目に参加しました。初日の前半はオペラ形式でオーケストラピット(以下「オケピ」)を使用し、ス

テージはスクリーンのみ、1階で聴いたのち、4階(建物では9階)まで上がり音響効果を確かめました。4階は音がダイレクトに響き、3階は天井の反射板の効果もありよく響いていると感じ、2階はバランスよく響き、聴き心地が一番良いと感じました。1階もバランスよく聴けますが、何となく2階よりは劣る感じがしました。

後半は、スクリーンのみ、コンサート形式でステージに上がり、オケピを迫り上げての演奏で効果は前半とさほど変化はありませんでしたが、ティンパニをはじめとする打楽器が全く響きませんでした。

2日目の前半は左右にカーテンの一部を残し反射板を設置したコンサート形式で、前日と同じように4階から順次聴きました。反射板の効果もありティンパニをはじめとする打楽器も各階バランスよく聴こえ、4階ではやはりダイレクトに響いていました。後半は完全に



ヒタルの4階から見た客席とオーケストラピット

反射板を設置しての演奏でしたが、響き過ぎるのか各階の中央はバランスよく聴こえました。左側は右の音が聴こえづらく、右側は左の音が聴こえづらく、バランスがよくありませんでした。3日目は客席に1300人余りを入れて機器による低音から高音に至るまでの効果測定を行い、前半はカーテンを下ろしたオペラ形式、後半は反射版を完全設置したコンサート形式で行いました。私の席は左側で右の音が聴こえづらく感じましたが、反射板に音が抜ける部分がなく響き過ぎる部分はないというのが感想です。コンサート形式となると

じたことは、オケの音が大きすぎステージの音が聴こえないのではないかと心配しましたが、これは無用な心配であればいいと思います。

会員/武藤義典

## ありがとうございました



**ヴァイオラ遠藤幸雄さん 8月退団**  
「7年間過ごしたイギリスの作曲家の曲を私の誕生日(8月25日)に演奏して退団できたのは、本当に幸せでした。」



**コントラバス信田尚三さん 9月退団**  
「札幌くらぶのようなファンクラブは札幌市民だからできるでしょう。若い楽員さんが多く入りました。末永く応援してください。」

## スタッフの活動報告

- 7月30日(月)  
会報「札幌くらぶ」第83号発送作業
- 8月25日(土)  
札幌市内中学校吹奏楽部招待事業  
光陽中30名
- 8月27日(月)  
第4回運営会議
- 9月20日(木)  
第5回運営会議
- 9月22日(土)  
札幌市内中学校吹奏楽部招待事業  
上野幌中18名
- 第12回日本プロオーケストラ  
ファンクラブ協議会札幌総会開催
- 10月22日(月)  
第6回運営会議
- 10月27日(土)  
札幌市内中学校吹奏楽部招待事業  
手稲中26名
- 11月10日(土)  
第23回「札幌くらぶ」サロン

## 編集後記

第12回JOFCC札幌総会が無事終了しました。胆振東部地震直後で開催も懸念されましたが、主要行事は札幌定期公演を含めて予定通り開催することが出来て、ほっとしております。今回は仙台の予定です。(有田)

6年ぶりのJOFCC札幌総会が胆振東部地震の影響で開催が危ぶまれました。皆の努力で予定通り終了出来て、スタッフ一同安心。残念なのは新しくできたヒタルの見学が中止になったこと。ホッとしたのは束の間、この会報の作成に着手し、予定通りに発行出来たことは嬉しい限りです。(佐々木)

横浜の中央図書館に楽譜がいっぱいあった。六列の本棚が並んでいた。静かに譜面を読む方もいた。音もなくメロディが流れて居るようだった、その頭の上で。音の色彩を楽しみながらの読書、譜面の季節に身も心も鼓する。ヒタルの下、交流プラザでそんな探検を始めようと思う(爽)